

(5)

空の斑点*

靄がしろくそらに垂れて

さゝやかな雨が地上ちじやうにふる。

春もあたゝかくなつたではないか。
うつすりと濡れて

私は丘に佇たつてゐた。

あをあをと伸びた西洋芝の

ひそやかな出穂でほをふと見出した。

雨がちな春空が
むつと照つてはまた曇る。

霧ぐもつた春ぞら、

けふも私は

彼女の留守をまもつてゐる。

うつろなる家に。

連翹のさいてゐた

あの村むちを歩んだのも、

Y子よ、春のいまごろであつたではないか。

みちのくの山には

まだ雪がひかつてゐた。ね。

あらゆる緊張さをもつて、

響音きやうおんが

にはかに近くきこえる。

春ぐもりの空に

飛行機が三つ、くろく見える。

空のあのちひさな斑点が

はげしい響きを

地上にふるひみなぎらすのであらう。

私はおもはず

飛行機を見あげた。

山の中腹の

黙々とした禅寺に

丹いろの木瓜のはなが

樹を満面にさき埋めてゐた。

芽ぐんだばかりの軟かな嫩葉に交つて、

五つ六つの

しほらしい蕾が見える。

鬱金櫻の苗樹。

露のほろにがさ、

茗荷のふしぎな味はひ、

そんなものを

私はいまは好くやうになつた。

さぼてんの

紅いろの花が

房々と垂れてゐる。

粗物やの店さき。

鋤きおこした裸田はだかたに、

水がいつぱい湛たへてゐる。

風がなんとなく生なまぐさいやうな
春うすらぬくりゆふべ。

・
曉あやう々、曉あやう々、曉あやう々、

ぎや／＼、ぎや／＼と

哇ぐんせいの群声ぐんせいのみが充ちてゐる

春の螺田らでん。

・ 註。ぎや／＼は擬音ではなく、ぎ・や／＼(Gi-ya gi-ya)の如く読む。

ひとりゐのこのごろ、

湧わいてくるもろ／＼の鬱ふさ念ねん。

暖ぬかい雨あめに

・ 土壤どじやうに濡ぬれ熟じやくんでゐる。

みづからの臭癖しうへきには

かつて気づかぬやうな

しかも心おごれる

人間の

・ ふしぎな一つの錯覚さくかく。

黄わうがかつた岱たい赭しやいろの

明めいるいしつとりとした洋髪やうがみが
彼女かのじよに

もの好このもしく似にあふ

晩春のやゝおもたげな感触。
ばんしゆん

(*) 「日光」 (大13・6)

(6)

高原(*)

高原のすがしい空気が

私わたしのこゝろに沁みとほる。

しづかなしづかな

・ 黙人のやうに。

黄くわんいろい萱くわんそうのはなが

草はらのなかに揺れてゐる。

高原の夏に

私はいのちの潤ひをもとめる。

・ 花崗岩のくづれが

しろく埋めてゐる河原のなかに、

一脈のつめたい水の

・ さらさらとしたあをいろの流れ。

落葉松らくえいしょうの群生ぐんせいが

ひろい河原に素立そだつてゐる。

離反と融和と、

あらゆる自然の姿容は

かくて胚胎するものでもあらう。

・ うつくしいうつくしい

この高原の光り。

喬樹けうじゆと山草さんそうと相集まつて、

私の全身とつゝみ

全身をまもる。

究まりない天上の

愛のすがたが私にこもる。

高原が

私にもたらず浄洗礼。

白樺の群落をもとめて

朝はやく私は山の小路をたどつた。

露がしとしとと

私の袂と裾とをぬらした。

あゝ、高原のけだかさ。

一切の曇りをもたない

すきとほる無色の雰圍気。

私はそこに息することを

限りなきいのちの幸とする。

附言。この一篇は昨夏の作であり、既に一度大阪毎日紙上に掲げたものですが、「日光」の読者にぜひ読んで頂きたいと思ひましたので、二三の語句を訂正してここに再掲します。

* 「日光」(大13・7)

「まえがき」への追記

いま届いたばかりの『近代文学研究叢書』第六十卷(昭和女子大学近代研究所、一九八七・九)を見ると『現代文学大系⁶⁸現代歌集』(筑摩書房、昭和43・5)に石原純の「新短歌抄」があるという。取敢ずこれだけ記しておく。(一九八七・九・三)

(7)

枇杷山行*

枇杷山の

びわの木の

おほきい枇杷の実の

やはらかい手觸り。

枝々にあかく熟んでゐる

枇杷の実が

しらく粉ぶいてゐる

なつかしさ。

厚ぼつたい葉と、黄いろい実と、

眼前に交錯する

枇杷の果樹林。

選りもいだ

枇杷の実を味つて、

枇杷の木への

なにとない親しみが湧く。

樹間につるした

笹のなかに、

枇杷の実をひとつ

だいじさうにもぎ入れてゐる

枇杷林のあるじ。

吸ひあまる果実が

ほた／＼と足もとに落ちる。

枇杷の熟れ実の

ゆたかな味。

枇杷に飽いて

果樹林を出た。

あをい海湾と地峡とが

地図面のやうに低くみえる。

草原にといた

飯包みに

にんにくが匂ふ。

素あたまに陽があつひい。

まろがたに

象の眼を嵌めたやうな

酒ごのみなひとりの

笑ましげな顔。

梅雨どきながら暑い。

暖國の

海ちかい山に

唐椎の花がさいてゐる。

枇杷のかご荷を

かつぎゆくひと。

枇杷のひと村のいそがしき。

* 「日光」(大13・8)。枇杷山は房州富浦の枇杷園である。

満州歌*

鴉片売房

埃まみれな

煉瓦の旧屋きうおくの

磨き減つた狭い階段をのぼる。

夜の電灯がくらい。

鴉片売店房の奇態ないく間。

暑夏の或る宵であつた。

鴉片売房の陋屋の階上に

怪奇な形色をわたしは見た。

灰いろの空気、黒い呼吸、

そして偶々燃える鴉片の赤い火。

壁隅にとりつけた

横木よこぎの台を枕にして、

肌ぬいだ労働者らが

寝ながらに鴉片を吸つてゐる。

暗憺たるひとつの世界。

鴉片中毒者の

あをじろい皮膚が

黄いろいランプの火とならぶ。

うすぐらいこの部屋にこもる

ほのかな煙のにほひ。

燻ぶつた真鍮の匙に

沸々と泡だつて、

薬液のやうに

黒褐色の鴉片が煮える――

鴉片が煮える。

喫鴉片、喫鴉片――

藍いろの支那服を着た

辨髪のいちにんが

鴉片を煮ながらこちらを向いた。

あゝ、人生に

恍惚とした夢を齎らすであらう

ふしぎな酔薬。

かれ等は、もうもの倦い眼をして

しきりに鴉片を吸つてゐる。

温泉行

アカシヤの実が

あかく房々と垂れてゐる。

高梁の穂ももう出はじめた。

「温泉までどれ程あるの、」

「二じゆ五里」と

支那人ボーイがいふ。

一馬の驢馬が挽いてゆく

トロツコ馬車。

かはいらしいではないか、

驢馬の歩みは。

わたしもそれに乗つて温泉へ行つた。

ポブラとアカシヤに囲まれてゐる

たつた一軒の温泉宿。

木立をくぐつて

河べりに出ると

さて、どことなしに

馬のにほひがゆらめいてくる。

河原のあかい砂から

あつゝい湯が湧くといふ。

腰張りの板小屋のかげに、
おゝ、温浴をする

そこばくの人だちが見える。

どこまでも続く高粱畑、
果てしもない平野のなかを

河原がひろくくぎつてゐる。

だれが、この河原に湧く温湯おんたうに、

自然の黙示を

撰受したことであらう。

ひろい河原を

しきりなしに涼しい風がふく。

砂湯にぬくんだ

いくつもの裸形裸身らげうを

風がさらさらとふいてゐる。

のんびりとした

併し、何となくたよりのない

ものさびしさ。

温泉聚落の児童たちよ、

なんぢらの郷土はつひに遠い。

天地が創まらうとするやうに

しづかなあかつき、

私は河原に出てひとり湯につかった。

雲雀がすい／＼と空へあがる。

あがつては落ち、落ちてはあがる。

籠さげて

夜釣から帰る支那人、

河原をかちわたつて

楊樹やうじゆの蔭へ隠れてゆく。

満人村落

アカシヤの並樹――

薄い朝もやのなかに、

薪木たきぎを負うてくる

いく群の驢馬すゝおとの鐸音たつおともなつかしい。

満人村落からは

胡弓の響がもれて来る。

満人村落にしづかな晝。

大道だいたう小道の楊樹のもとに、

何するともなく

圓座してゐる老若男女なんによ。

石ころを積んだ

でこぼこな塀が

すべての家をめぐつてゐる。

満州旗人きじんの一村落が

ひっそりと眠る晝のしづけさ。

黙々たる一村落。

たまたま驢馬がいななき、

さうして土民が

原始楽を奏するに過ぎない

寂寥たる満州一村落。

* 「日光」(大13・10)。随筆集『夾竹桃』(昭18・7)に「熊岳城」という短文があつて、そのあとにこの作品の「温泉行」以下が多少省略のうえ

再録されている。再録された部分の語句の加筆はない。

(9)

夜の聖壇*

飽くまでも月はしらじらと澄んでゐる。

もう初冬しよせつの肌さむい夜である。

この離れた丘のしづかな平らに

うねりめぐる曲線の路をのこして

芝生がくろずんでひろがつてゐる。

すべてが神秘につままれてゐるなかに

ひとり佇む人間のこころのくすしさ。

わづかに睡蓮の葉の浮いてゐる

あの小さな水たまりも

いまはわが前に盛られた

聖水盤のやうに見えるではないか。

松の老樹が群立つてゐる

その向うのいびつな山も

さながらに黙したともしい聖壇である。

若しそこにひとつの淨い火が生れるであらうならば、

あゝ、なんじ創つくられたものの意味ぐかいたましひの閃ひらきよ、

なんぢの踏む土はつめたく光り、

なんぢの心臓はとこしなへにそのかさかな絶えざる響きを

このふしぎな夜に伝えるでもあらう。

聖壇と、さうしてそこに跪ひざまづくものとの

ささやかな、併しふかい陰影をのこして、

月は飽くまでもその天空に澄んでゐる。

欲念

空虚から空虚へとうごく風——
そして人間の欲念。
おゝ、黒い扉が彼れのまへに動揺する。

浴室

くろい漆喰壁とタイルと、
あたたかい銀いろの湿気を、——
あれもいづこかに、みにくさをかくす
人間のすがたであらうか。
さながらにゆるやかにうごく
ひとつのしなやかな裸身の彫像。

人間貯蔵所

かなしい変態ではないか。
しろつばいトタン張りの急造屋根が
全都をおほうてゐる蕪雑な風景。

粗末な

金属屋根のむらがり、

さながらに似つかはしい大きな人間貯蔵所。

一夜、——空気のしづかに冷えるとき、——
だが、この人間貯蔵所にも
あらゆる生命の汚濁をふせぐ
一つの尊い薬液が落ちそゝぎはしないであらうか。

* 「日光」(大14・1)。初め的一篇は『人間相愛』および『夾竹桃』に再録され、多少加筆があるので、本文は加筆に従った。

(10)

風(*)

師走の寒い風がひゆう／＼と鳴つてゐる、
風はどこに鳴るのだ。

なんのために風は騒ぐのだ。

あの風の鳴るやうに

世間もひどく騒がしい。

しきりに湧く喧囂の声、――

それは畢竟なんの効果をこの地上にとどめるのであらう。

おほくの人たちよ。

空たかい風こそは

黙々とした空気の自然の流れである。

あの囂々と鳴るのは

なんぢらが家の戸扉ではないのか。

ひゆう／＼と音するのは

これに逆らはうとする地上の固着物に過ぎないのではないか。

人間の世はながい。

そして個々の生がある。

そこには思想のおのづからな流れが横溢するであらう。

だがそれを抑へやうとするのだ。

そして喧囂の騒がしさを醸さうとするのだ。

おほくの人たちよ。

あの鳴り騒ぐ風に寂しさをそゝられる

詩人の脳漿を解剖したいとは思はないか。

黙々たる天上の哲学者に倣はうとはしないのか。

徒らに囂々と鳴るのは

なんぢらが腕と唇とにすぎないではないか、

ひゆう／＼と音するのは

なんぢらが待つちびれた鞭の響きではないか。

だが、どこまでも――

風は空気の自然の流れである。

師走の巷は寒い。

そして／＼厭ふべき響がそこに充ちてゐる。

「日光」(大14・2)。(*)

(11)

冬頃(*)

内湾と平野

初冬の陽が晴れやかに澄んでゐるが、

どこかうすぐろくひかる

内湾の浅い水面。

沼のやうな干瀉がつゞいてゐる。

内湾に

枯葉のまばらな線がさみしく立つ、

冬さびたひろい田に、

枯茎が畝づいて

平行線にうごめいてゆく。

汽車の平調音の間断ない響きとともに。

内湾につづく

しづかな初冬の平野。

ひさびさに、ふたりして

汽車にのるころもうれし。

ゆふ日があかい

汽車の煙も

いろづいて淡くとんでゆく、

冬菜の

ふつくらと青いひろ畑のうへに。

暖風

こよひもまた、さうくくと

西南風さいなんふうがふきよせる、

南方の暖流の潮をふくんで。

あはれ、めぐましい南國の冬。

冬ながら、なにとなしに

息ぬくいきむ海のかぜ。

野づらの水仙の花も

ひそかに匂ひふゝむであらう。

漁村

曆春のひと日を

このわびしい漁村に來た。

南風がつよくふいて

舟はみんな浜にあがつてゐる。

漁師も、だあれもゐない。

冬とはいへ、

あくまでもつよく

藍ぐるいひかりを湛へたおほうみ。

このうみの水平線のしたに

ひっそりを漁村の家屋根がならぶ。

砂みちが

潮に濕しめる。

舟底が 潮に濕める。

風も ひどく潮をふくんでる。

大船に、茅屋根を着せ、

薦屋根こもを被かせ、

この浜辺に
わびしくも、浪のしぶきがあがる――。
冬荒れの風。

家かげの
簀の子のうへに、
干魚があまた並べてある。
風が、べら／＼と
トタン庇をあふる音――。

ははあ――、さすがに
南国の浜辺である。
舟大工が、素裸の背に
冬日をうけて
木を挽いてゐる。

よろよろよろ――、
馬子がよろよると
馬牽いて酔ひよろけてゆく。
村正月の真晝の街。

まつくろけな、まつくろけな
バナナの実房と、ちひさな蜜柑と、
だが、親しげに
くろい盆にのせてある、
漁村のある宿。

騒忙

せはしい／＼とかこちながら、
人たちは用もない話をし続ける。
さはがしさをなげきながら、
樹々が風に吹かれるやう。
だが、風なしには

世界はあまりにさびしい。

大晦日

或るジャーナリストの資本家が

苦にがくふるへても言つてゐる。

この大みそかに

私はひとりの文筆労働者として

彼れのまへに黙然とゐねばならなかつた。

「なにがしの小説は、一万部以上売れる……。」
売れることのみを最上とする資本家には、
学究はもはや路傍の砂礫にも値ひしないのであつた。
かうして歳は暮れてゆく。

くすぶつた狭いバラツクの部屋に
ストーブがぶすくくとくゆつてゐる。
わたしはこんなところに
何しに待つてゐるのだらう。

(*) 「日光」(大15・2)。

(12)

黄と黒(*)

黄と黒との毛糸で

彼女が好ましくも編みまじへた襟巻を、

くるくると無造作に頸うなじにまきながら

けさも彼女は歌つくつてゐる。

油絵具の匂ひをふつと嗅いで、
こゝろやゝ疲れをおぼゆ。
なまぬるい部屋のあたゝかさ。

石油ストーブを然やしたが、
椅子による

足のくるぶしのうしろが
ふと寒けさをもようす瞬時の織感（**）

陶酔のこゝろよ。
陶酔はうれしい。

だが、陶酔はもの果敢ない。

冬の日のかすかなぬくみもさめてゆく。

池みづの寒く凍れば
しろき家鷺、

みぎはより嘴をつきいれて居り。

I 君の渡欧をおくる

フレームのなかでは
ヒヤシンスの蕾が

もう色づいてふくらんではゐるが、
春はまだかなり寒い。

はるかな海のむかうに
藝術行脚に旅立たうとして

せはしく準備してゐるでもあらう君が姿を、
いま私はここに浮べてゐる。

私たちはこゝに待たう。

君が屢々絵筆をとつたこの丘の家に、
せめては草花の生命をめめて私たちは待たう。

そしてキャンバスが新らしく塗られる日に、
君の藝術のゆたかな生長が
そこに溢れ出るのをよろこぶでもあらうやうに。
この望ましい希ひと、そしてすこやかさを
いま私は心から君にいのる。

(*)「日光」(大15・3)。

(**) 繊細な感覚をつづめたのであらうが、無理な造語である。初めは誤植と思ったがどう正すべきか分らなかった。しかし情景は分る。冷い空気が床をはつてストーブの方へ流れているので、椅子に腰かけている人のふくらはぎが寒いのを言ったものである。この対流を避けるには、椅子に膝掛けを床までとどくようにつけ、その上へ腰をかければよい。

(13)

短章連作(*)

土

乾いてゐた白土が
雨に濡れてはしつとりと黒くなる。
黒くなる。

土の匂ひを嗅いでみると、
しめつぽいやうな、
なまぬくいやうな、
それでゐて、どこかくすはしい。

土に手を触れると、
ゆつたりとして気分が湧く。
土の永劫ないのちを感じるやうに。

ほたほたと水が滲み落ちるぢやないか、
あかい粘土のあらはな土手から
あんなふうには水脈が
どこでも土の慈しみを準備してゐる。

ゆたかな土のすがた。

春の陽が射し透ると、

ひそやかな動きが土に充ちる。

土は

あらゆるものを包含して、

黙然と

愛をふかめる。

生をもたない土のなかにこそ

生の根源がある。

土の暖かみに包まれて、

まつしろな草の根が

処女の腕かひなのやうに延びてゐる。

野茨

野茨のあかい実が

あかい実が

房々とひかつてゐる。

冬枯れの草土手のうへに。

大井川

五百五十日間のながい木橋もくけうが

ゆらゆらと揺れる、

たよりない人生の一路のやうに。

橋番の小屋に

蚊いぶしの煙がもうもうと立つ。

あはれ、番人のあかい顔。

幅ひろい河原のあちこちに

ゆるくうねってゐるはらかな流れ。

茶をつくる平らな丘が

向ふ岸をながく劃る。

大井川から引いた堰水が

宿の庭さをしろく濁つて流れてゆく。

女のうつくしいといふ東海道島田の町。

棚機のゆふべ、

笹かざりが町の堰水の傍にならんでる。

筒袖の女子の群がとほつてゆく。

浜名湖

しづかなる藍碧の水を、

みどり浅い陸土と

相交錯し相断絶する。

館山寺くわざんじを圍んで

浜名の湖水はうつくしい。

陸路はるかに

浜名湖の北をめぐつて、

ふと、海草を干した

なまぐさい匂ひをかいだ。

松の並樹が

両側に立つてゐる昔ながらの街道を
夜、自動車で一直線に過ぎる、
夢のくにも入りゆくやうに。

・
浜名湖は明るい人と人がいふ。

なけば塩からい水。

くろ鯛の味もいゝぢやないか。

・
海水着の女の

あでやかないろどりが

ゆらゆら動きただよつてゐる

くろい干潟。

(*) 「日光」 (大15・4)。

石原純新短歌抄（六）

『ももんが』

一九八七年一二月号

（14）

春寒い日（＊）

越中島

電車を降りて、
だだつびろい新開地の
でこぼこな路をあるいた。
かぜがまだ寒い。

十数軒の細民長屋が
ひろい枯原のなかに
埃まみれに立つてゐる。

塵埃焼却場の煙が
風に
もうもうとなびいてゐる。
空がむせつばい。

ながい
片側の塀のなかも
しんとしてけふはものひそましい。
粗末な洋服を着て
ひとりぼつとり歩いてゐる人。

空とつちと
すべてがすすさんであるこの町に、
海のいろはどすぐろみながら
さすがに潤ひをみせてゐる。

室内

地名辞書の一巻と

黄いろい珈琲茶碗とが

円い卓上に残つてゐた。

農民美術の木皿の上に

時節おそい蜜柑を盛つた

この春のなごりに。

冬の陽が一ぱいに部屋へ充ちるのを

楽しんでゐたが、

敷物の染色の褪せたのが

このごろだいぶ眼についてきた。

病ひ

春となつてうそ寒い日が続く。

このごろ少しはふとつたと云つてゐたのに、

彼女はまた熱を出すやうになつた。

体温器をすかして見て、

「あらこんなに」といふ

ものなやましき

にがい薬を

強ひて飲ませて、

でも、彼女の熱は

けふも七度五分を超えた。

フリジャが

始めて箱むろに咲いた日頃である、

彼女が風邪を病んだのは。

風邪の病ひは

春になつてからおほい。

いつまでも咳がやまないと、
彼女は気にしてゐたつけが。

薔薇のあかい芽がひらいた。
ほんのりと熱ばんでゐる。
彼女の頬。

無理してはいけないと、
しかつても戒しめても、
なにか仕事せずにはゐられない
彼女の気質でもある。

夜更けまで私は原稿を書いた。
まだねむらない
彼女のこころを気にしながら。

電灯がまたうすくらくなり出した。
Y子の咳きいるのが聞こえて
ものけうとい夜である。

(*) 「日光」 (大15・5)。

(15)

初夏(*)

いつぼんの
うす紫の桐の花が
雨に濡れて
山畑に立つてゐる。

麦もすっかり黄いろい。
どこかに
日向くさい臭ひが
湧いてくる。

野蒜が日向でみねむつてゐる。
木苺はひそかに
恋人を待つてゐさうである。

ヴェランダの電灯がさに
つばくらが巢をつくつてゐる。
あかい嘴。

つばな
茅花の種が

すくすくと伸びて
日にかかるつやゝかないろ。

人間と人間とのふしぎな生命は
ひとつの言葉でもつながれる。
かうして人生はうつくしい。

(*) 「日光」(大15・7)。

(16)

春の名ごり (*)

(*) 「日光」(大15・12)。これは(13)短章連作、(14)春寒い日、(15)初夏から抄出してかく題したものである。語句の改変は全くないので重出せず、題名だけ残すことにした。作者はこのような形で鑑賞に堪えると考えたものと思う。以下に抄出された部分を記しておく。(13)からは「土」の第一・二・三・六・七・八小節と「野茨」の全部、(14)から「越中島」の第一・三・四節と「室内」の第一・二・三・六・七・八小節である。「日光」に発表された石原純の新短歌作品はこれが最後となつた。「日光」はこのあと昭和二年六月号が北原白秋の編集で刊行されたが、石原純は「葎子さんの印象」という追憶文を出しただけで作品はない。この年日光同人三ヶ島葎子が死去した。

以上で「日光」に発表された石原純の新短歌作品の全部を収録することができた。このほかに歌論が掲載されているが、これらについては別の機会に述べるであらう。

(17)

終列車

貨物混合の

ある鄙びた地方の終列車

冬ながらステイムも通らない

くすぶつた汚ない三等客室内に、

ひとりふたりの旅客が

外套にくるまつて

こくり／＼ゐねむつてゐる。

うすぐらい黄いろい灯火が

手垢じみた空椅子の肱掛を

妙にきらりとひからせてゐる。

床にちらばつてゐる紙くづの塊りも

黙々としてなんとわびしいことであらう。

路々の小駅ごとに

たま／＼の駅員の声もとだえ

そこばくの荷をあげおろす

駅夫のみがいつまでも何か云ひあふ。

ひどく気ながい停車のあとで、

がたりとした激動が

ゐねむつた人たちを驚かしながら、

汽車はまた、気のぬけたやうな

その緩々とした進行をつづける。

さながらに退屈な

無為な人生。

くらやみのむかうには

いつ崩れるかもわからない仮修繕の隧道や、

危なげな橋梁さへも横はつてゐるが

併し、何を考へるともない

いち時の気安いころで

私たちもまたそのなかに座るのであつた。

(*) 「波止場」(大15・3)。千葉県鋸南町の鈴木伊三郎氏から提供されたコピーによれば当時保田および近辺の文学愛好者たちが石原純および原阿佐緒を指導者として短歌会を作つて発行したもので、これが創刊号であるが、第二号が出たか否か、当の鈴木氏もはつきり記憶せず、当時の仲間の中にも二号を持っている人はいないということである。

(18)

曼珠沙華(*)

曉々、曉々、曉々、ぎやぎや、ぎやと蛙の群声のみが充ちてゐる春の裸田、野蒜が日光でぬねむつてゐる。木苺はひそかに恋人を待つてゐさうである。あのへちまの空花のように、ひっそり死んでゆく人たちもある。五位鷲がなく、あちらにもこちらにも、木星がたつた一つ見えた空は幻想的な曼珠沙華のはなが草土手をあかく染めてゐる、死人もだれもゐないのにこどもらが無心に摘んで無心に捨てたあかいあかい曼珠沙華の花くさむらのなかにうづくまつてゐる蛇、へんに気味のわるい一つの曲線偶然を僥倖とする遊戯、わたしは人生のいくばくを自分で創り出したのだらう。星がきらきらと輝く、あそこにも電子分列があるんだおばあさんはいにくく >とお茶をいれてくれる。話は別にないけれど、私もおばあさんの顔を見るのはすきだ。

(*) 松本昌夫編『昭和日本歌選』(昭3・10)。

この歌の方一段の蛙の声は(5)空の斑点の終りから四番目の一小節であり、第二段の野蒜は(15)初夏の第三小節というように、旧作の一部分がそっくり使われている所もあるが、それから後は新たに作ったものと思われるから、独立した作品と見るべきである。このような形で曼珠沙華という題で雑誌に載つたものか、この選集のためのものか不明である。終りの方に電子分列などという不可解な語もあるが、いまこの本のまま収めておく。この本は中野嘉一氏から借覧したのである。

石原純新短歌抄（七）

『ももんが』 一九八八年一月号

（19）

梅雨の楽譜（*）

雨滴^{うてき}の楽譜をでもつくらうと、

うつとり

わたしはそれに聞き入つてゐる。

秦山木の

巨大なしろい花をみてきたが、
それもしづかな感傷を
そゝるのみである。

トランプの占ひにでも

夜を更かしてゐるであらう。

病身な彼女の

またしても寔れたこのごろのものがなしさ。

発熱の日々が続いて

さすがに、素直な気ごころの

眼につくいぢらしさ。

小砂利の響の

いやなさわがしさを

わたしは、ふと想ひ出してゐる。

無心でねむたさを

感ずる瞬間でさへも、

おまへは

プロレタリアなのだ。

プロレタリアの自覚を

だが、

くさめをしてさへも

そこに意識づけようとさせるのだ。

陰うつな日である。

ひとつの生理的象徴が

囚はれたものを解体しはじめる。

運命の

信号標が傾いて、

さびしさを感ずると云ふのか。

しめつぽい日々の

いくたびマチ擦つても、

点火しないほどの

心のいらだたしさ。

* 「三角州」七（昭4・7）。これはこの作者が主宰した同人雑誌である。

プロレタリアなどという言葉が出て来るのも昭和四年とう年代を考えれば理解できよう。こころみに歴史年表を見られよ。

(20)

偏執(*)

ひそかな暗夜は

愛撫にふさはしい感さへ湧くが、

人生は永劫にひとりである。

つめつてみた筋肉に

動物性を感じることの

凡常な真理、――

わたしはかうしてしば／＼生をかへりみる。

わたしの脳髓の上層に
なにもがあるであらうかと、
たよりなく探る、ものわびしき。

この生活不安の焦燥のなかに、
せめて、

一日のこゝろを閑しづかならしめよう。

ひろびろとした芭蕉の葉が

しきりに窓に触れて、

山房の夜は更ける。

なにか知らぬ気味よき。

雷鳴が空にひびく

もの凄けしきに、

あの植物の

生殖細胞さへもが慄へてゐる。

またしても憤ろしい。

だが、偏執者は

おそろしい鎖で

うしろ手につながれてゐる。

沸られるやうなむし暑さ

あの執拗な階級闘争は

いつまで続くのであらう。

階級闘争、

そんな恐ろしいものがお互いに迫つて来るとは、
地上の空気をはつきりといろづけて。

(*) 「三角州」九(昭4・9)

・ 大気が狂心するやうにふるへて、
秋の空の
こまやかな顫律。

・ 平凡をけなして、
みんな感覚錯倒を誇らうとするのでした。
資本主義の有閑者の
ほんたうにわるい癖です。

・ 気圧計の水銀面が
けさはとろりと曇つてゐて、
やがて、
なにかしらの変動だ懸念される。

・ あの不気味なあらし雲の感應で、
めい／＼に
鬱憤をみなぎらしてゐるであらう
さまざまな階級者。

・ 人間の懐かしい声が、
そして人間のおたがひの思慕さへが
すつかり無くならうとしてゐる、
压抑のあまりな激しさに。

・ まばゆくも
白い夜光の放射である。
変電所の柵外は
あまりにもわたしの心を刺戟する。

・ この深夜を通じて、

電流変圧器が、
もの凄くうなつてゐる。

こんなにも雨が降つて、
わたしらの感情を
みんな流溢させてしまふ。

じつさい、わたしも
ひとりの無産者に過ぎない。
でも、あの毒々しい
変態的憎念を嫌ふのである。

(*) 「三角州」一〇(昭4・10)。

(22)

紙片の区劃(*)

有機微生物の
たくさんに散らばつてゐる
幻睡的な空気を吸ひ込んで、
疲労を感ずる。

みんなどすぐろい吸収線をもつた
雑色のあらはれなのだ。
人間のこゝろには
へんなかたまりが秘んでゐる。

誘蛾灯のやうに光塵が
夜の街頭につらなつて、
またしても、むだな消費心をそゝる。

紙片の区劃を一つ一つに埋めて、
それで

せめてもの生命いのちを燃もやさうとする。

紙のしろさにも

いろいろの階段がある。

さて、ふしぎな細胞分裂である。

なんとなく恐ろしい薄い背面ではないか。
いまにも、冬さびれた寒い風が、
それをびり／＼とふるはせるであらう。

ひとつの象徴を探らうと、
じつと、

容貌を瞰みてゐる。

いらいらと怒りたいのも、
まざ／＼とさびしいのも、
唯物的な肉体の
なにかの生理的機能の支配されるのだ。

けふも

飛行機が空たかく飛んでゐる。
あのすばらしい爆音の響のやうに、
わたしもなにかを夢みてゐる。

黒い蝶が

あのうつくしい鱗粉をみじめにも失つて
さて、どんな運命が
そこに求められるのだらうか。

(*) 「三角州」 一一 (昭4・12)。

童心*

ひそかな童心をいだいて、
あの社会人らに遇ふのが
いつも嫌悪される。

壁面へきめんの

微細な亀裂にみいりながら、
わたしは

自然科学者であることの幸ひを感じる。

言詞ことばが、

そしてなにげない面貌が

なんぢらの心のよごれを押し匿してゐる。

かくて、人間は

死ぬべき運命を負ふのである。

気分の

ほんのすこしの轉換をのぞんで、

紅茶の濃い渋味を啜る。

慌ただしい

なんと人情気のない社会生活、――

あの街々にふきすさぶ風が

社会人らの涙を蒸発させてしまふのだ。

経済戦はいづこにも酣である。

ふところに

いち枚の紙幣を探りながらも

ふと、さびしさに魅入られる。

気圧七五六ミリメートル。

どんよりと曇った冬ぞらが
夢のやうに私を抑へる。

灯の街を歩まう。

そこには眼のふくらんだ

蝶と蜻蛉とが飛んでゐる、

交叉点の信号を合図に。

妖精の具体化のやうに

女は微笑する、

そして羞恥する。

* 「短歌創造」一の一（昭6・2）

石原純新短歌抄（八）

『ももんが』 一九八八年二月号

（24）

全反射（*）

ひたすらに
心のかゆさを抑へて
対話することのもどかしさ。

眉と唇とがふるへる。
かくて、微風が
かすかに水銀の面をかすめた。

鼻孔びこうにたまる

くろいほこりを見るやうな不愉快さで、
私は彼を想ひ出す。

わづかなしめりでさへも
あの電圧を変へるとしたら、――
さうだ。自然は
無限に繊細な感情をもつてゐる。

くろつぽい硝子の
全反射的なはやかさ、
それがふとおそろしく
わたしの眼に反映した。

ヒステリー症患者のやうに
感乱する
都心のいらだたしい姿であつた。

片屋根の傾斜に残つてゐる雪が
やがて解消する運命をかこつてゐる、

ルンペン労働者のはかない運命のやうに。

近代的な錯綜性が

わたしらの神経を疲らせてゆくが、
さて、だれが

新たな水を飲ませてくれるであらうか。

「それはそうでもあるが」――

人間は、いつもこんなことばで

自分たちの論理を辯証法的に追放する。

* 「短歌創造」一の一(昭6・3)

(25)

春の郊外気分(＊)

公設市場の赤い旗が

春の風に揺れてゐて、

郊外の真晝間はまどろんでゐる。

電車の通勤者を吐き出して、

郊外の遅い夕ぐれの狭つこい往來は

一種のめまぐるしい近代模様をつづる。

駅まへに草花店がひろげられ、

踏切りの人だまりにも

もう春がのぞいてゐる。

とり残された空地にも

新らしい家普請がはじまつて、

春日和のこのあたゝかさに

しきりに郊外気分を発散する。

安價な演芸場の小屋わきに

競りうり屋が声をからして、

春の空気に渦動が溢れる。

春小路の霜どけもめつきりと減つて、

やがて春の埃りが

赤屋根の家々を

しろつぼく包むであらう。

狭くるしい街の前からうしろからも

ラヂオが一齊に流れ出し、

外套に少し重たさを感じる陽気である。

都会の固い舗装道路からのがれて来て、

郊外の夜の土を踏むいささかの快さをおぼえる。

かくて、ことしの冬も終る。

省線電車の響きが一つしきり聞こえては消え、

郊外の夜の空には

とほい街の灯がどによりとにじむ。

(*) 「短歌創造」 一の三(昭6・4)

(26)

感覚の浮揚(*)

朝の空気層の一带、

感覚は波動となつて

浮揚する。

陽のあたつた草園で
ひそかに
心の陰影をいろどる。

丘陵の高低線がなびく。

焦点がぼやける。

あかい花梗が揺れてゐる。

なぜ木々の芽が

紅みを帯びてゐるのかを考へながら、

何かに触れたいこゝろがおこる。

人造人間が

手を挙げてつぶやいてゐるのではないか。

プラタナスが、街に

新鮮な芽をふいてゐる。

曇つた春空だ。

脳細胞がけだるい重みを感じて

さて、桃の花がひら／＼と散るゆふぐれである。

あを黒い髪の舞踏、

心臓の伴奏、

底ぐろい金属面が

やがて息でしろつぽく消える。

液体空気がさかんに蒸発する。

凍つた花びらが散る。

沈黙が夜を占める。

空はどこまでも自由に拡がつてゐるのに、
隣同士の境界線が
なんと窮屈相に劃されてゐるのだ。

(27)

秋(*)

雲がじつと空を包んで、
花が、ダリヤの花が
くろく咲いた。

女性細胞が餘り熟んで来て、
秋は
もう寒くなつてゐた。

処女性をしめすやうな
井戸水のほのしろい蒸気、
初霜の可憐な構図である。

無数の銃弾が
からだ一ぱいに打ちこまれた
ふしぎな夢を見た。
すゝかけの葉が荒々しくゆれる。

なにかの象徴かも知れない。
白い障子に對つて
ほつと眼底がくらんだ。

血が逆流するやうな苦しきです。
葉鶏頭も
ぐつたりと倒れて。

心の焦だたしき。
愛を燃やされぬもどかしき。

いち日を数万秒の長さに数へた。

あの純情の生命を

自分の胸に

引き入れるなんて、躊躇される。

わたしだつて、純情さでは

都会人なんかに劣らないと、

自分だけでは信じてゐる。

(*) 「短歌創造」一の一〇 (昭 6・11)

無限のしづかさ、

原子音楽のさまざまな微妙な形式が
じつと心に触れてくる朝。

大気は無意味に笑つてゐる、
うつすらとした光のなかで、
冷たい大地をつゝみながら。

ひえびえとした初冬、
人間の世界はまことにさまざまである。
離れるものと、結びつくものと、
わたしはその始終を知らない。

窓をあけると
黄葉の散るさびしさ。
近い空地には、
高压電線柱が新たに立ち並んだ。

影はどうして黒いのか
無邪気に聞いて見ても、
彼女はまだ
よそむきの言葉を装つてゐる。

とかく熱病的な心になやまされる
生々しい人間性であるが、
さて、癖はそれぞれに
じぶんには懐かしい。

なにゆゑに皮膚は

黙しながら語るのであらうか。
冬の寒さは、

ひそかに愛情を醗酵せしめる。

・
白銀色の感触、すまあとな声帯、
感情の味覚的な分析が
彼を徒らに感はせる。

(*) 「短歌創造」一の一 (昭6・12)

(29)

吉浜真珠庵即興(*)

よしはまの、吉浜の
うつくしい蜜柑山

暖かい冬には
みかんが黄いろく光るよ。

・
よしはまの、吉浜の
山のうへの真珠庵、
庵主の声も朗らかに
こよひは酒宴に更けて行つた。

・
酔うた、酔うた、
酒に、蜜柑に、
そして詩想にあふれる
よしはまの山と水とに。

・
暖かい海のゆふぐれ、
この山の小径をうねつて
蜜柑狩の家族づれが
みかんの籠をさげて帰る。

・
真珠庵のひと隅の

おほ柿の根もとはは
清水が湧くと云ふではないか、
恋のつかれもすぐに癒えます。

いち日の遊樂にきはまる、
よし浜の蜜柑狩、
蜜柑のうつくしき、
さて、あちらこちらには温泉が湧いてゐる。

(*) 「短歌創造」一の一二(昭7・1)

(30)

ソフイストのせりふ(*)

花の清浄性が感覺される。
黄いろい無数の斑点！
すばらしい爽快な表情が
街頭に並列する。

稚拙な心とからだとが撒かれ、
原野の散歩に
メロデイの匂ひがこぼれる。

へんぼんと眼が流れる。
肉体の断面、
なにかしら神秘的な夢を夢みる。

ほっそりと痩せた素顔、
ロマンチックな真実、
さて、
けふも明日も宇宙は廻転する。

毛髪の顕微鏡像は

くろい顆粒が踊つてゐて、
なつかしい人間性を記録する。

吸墨紙に滲みこんだ逆さな宇劇で
なにがトはれるといふのだらう。
性格破産はもうまつぴらだ。

わたしは金と銀とを探すかはりに、
あまりにも無價値な平凡な真理を――
追求した。

バロメーターが急激に沈降する。
晝と夜とを隔絶した歴史的構図。

鋭角風な、気のきいた音響が
わたしの耳に、鼓膜に
繊細な顫動を喘がしめる。

人体解剖は
卵巣からはじめやう、
彼女を

女性として尊敬するために。

愛情を蝕ばむバクテリアが
地上に繁殖して、

植物絶滅の危機が勃発する、

――一九XX年。

冬は、
樹氷帯のうつくしさにあこがれ、
また、
その冷たさに失望する。

畸形なる秋と、

残された孤独さと、

やがて幾何学は

有機卵形をも生むかもしれない。

針が飛散するやうな、

香気が蝟集するやうな、

そして空が逆立するやうな

存在。

肌の黄ばみに日を占ひ

空のたかさに

涙せられる。

染料は、濃くふかく

思慕の哲学を

いろづける。

紙片の燃焼気体をぶんせきする

化学者の態度をもつて、

生をじつ験する。

羅針盤が狂ひ

熒惑^{けいわく}は東に逆行するといふ。

あり得ることがあり得るのである。

季節はづれの颱風、

そして社会は

逆説的な変態に充溢する。

候鳥が飛来する、
なだらかな波状曲線を
ある競賣市場が攪乱する。

(*) 「短歌創造」三の一(昭8・1)。終りから第三小節の二行目に
ある熒惑とは火星のこと。

(32)
華麗なる街衢(*)

日が赫やく。

あの華麗な街衢の

舗装の軋^{ひび}いるやうな煩^{わづら}はしさ。

女が毛皮を負つてゆくよ、
交通標があをくなりあかくなる
ビルディングがよろめいてゐる。

しろい小羊のやうな感触をもとめて、
ある日、

銀座の街の夜を嘆いた。

さゝやかな露店が

藝術的に匂てゐる

そんな街路^{がいろ}を、そつと探しあるく。

群しゆうのなか、
いつも不調和なじぶんが
しかたなくあきらめられる。

おもくしめつばい夜の霧に

あらゆる愛慾がかくされてゆく、
ひとつのふしぎなしたしさ。

紫の畫像をひそかにあこがれてみて、
その愚かさを

わすれる。

プロレタリアートのころをびつたりといだく
すべてがくろくろくずんでゐて

いびつに歪ゆがんでしもふ。

ほのかな微光を

空に趁をつて

ふかいいましめに浸ひたる。

(*) 「短歌創造」三の二(昭8・2)

(33)

啓蟄の日(*)

啓蟄けいちっの日の鐘が鳴った。

ころおのづから暖かく
つちに労働者らがたはむれる。

空が飽くまでも卑ひく垂れてゐた。

ひとりの人間の存在さへも

蒸しされてゐるやうに。

春の空から落ちてくる

雨滴の荷電を測つてゐる

ひとりの科学者。

地が動揺する、

ゆめはゆめを生む。

科学者はいたづらに地心の形貌を探るにいそがしい。

頭を床に拾げてみた。

瞬間の奇蹟、

なにもない空漠の世界にこそ、眼ざめる。

春の暁である。

爪が伸びてゐて、鼠の喫音が

ひそかな狂燥樂を壁らうに発する。

錯覚をたつとぶのは偽である。

花蕊のなかで、

ある日、生殖細胞らが旋舞する。

遍光、遍明、遍照、遍在、沈黙する思念の相が

にんげんをみんなな死にみちびいてゆく。

(*) 「短歌創造」三の四(昭8・4)

